

市民がつなぐ交通教育ネットワーク

交通教育NPO OSCNじてんしゃスクール 代表 片山 昇

1 尾張旭市

愛知県尾張旭市は人口約8万3千人の街です。名古屋市、瀬戸市、長久手市に隣接し、『森林浴の森 日本100選』にも選ばれた愛知県森林公園があり市の6分の1の面積を占めています。中央には矢田川が流れ、自転車を楽しむたくさんの人の姿を見かけます。

2 じてんしゃスクールの始まり

自転車を愛好する仲間が集まると、「公道で安全に走れる空間や、技術を高められる専用の空間が欲しいよね。」という話がでます。

まずは、社会に受け入れられる自転車乗りを増やしていくことが大切。スポーツや趣味としての楽しい自転車が、社会に受け入れられるためには、自転車文化の土台づくりが必要です。そのためには、自転車を用いた交通教育が重要だと感じました。

地域の大人が、正しく安全な自転車利用を実践し、子どもの手本となる。合言葉は、『大人が変われば、子どもも変わる』。こうして、大人と子どもが一緒になって楽しく学ぶ、自転車を実際に使用した交通教育の場づくりが始まりました。

2012年12月には、(ベルギーの自転車教育を基にしたサイクリングスクール)『ウィーラーズスクールジャパン』代表 中島隆章氏にご指導



OSCNじてんしゃスクール

いただき、第1回「じてんしゃスクール」を開催しました。

3 親子で体験!

尾張旭市には、屋外の市民プールがあります。7月、8月の2か月間は、たくさんの人でにぎわい、歓声や水しぶきが上がります。夏以外の時期は、駐車場を市から借用することができます。一部舗装ですが、ほとんどが未舗装なので、サッカーや野球などスポーツにも利用されています。

この駐車場に、毎回、約20組の親子が集まり、大人も子どもも自転車に乗って体験します。ヘルメットも全員がかぶります。

まっすぐ走る・曲がる・止まる・安全確認・ブレーキ操作・周囲の状況判断・自転車の装備と整備など。



ちょっと難しいけれど、チャレンジしたくなる、わくわく感を盛り込んで、自転車の運転技術や交通ルールを楽しく学べる場づくりをしています。

保護者は(引率や見学ではなく)、自転車に乗って同じメニューを体験します。スクール後の感想からも、共通体験による啓発効果の高まりを感じています。

「じてんしゃスクール」は、日曜日の午前、2時間の開催です。限られた時間ですが、ここでの共通体験を持ち帰り、家庭での交通教育のきっかけとしてほしい、親子での持続的な交通教育のヒントになればと願っています。

＜小学生保護者の感想＞

- ・「私は久しぶりの自転車で、翌日は筋肉痛になってしまいましたが、夢中になって、自転車を練習する楽しさを息子と共に知りました。」
- ・「親子で楽しく体験しました。娘は、まだまだブレーキ練習が必要です。ブレーキのかけ始めが遅いという改善すべき点が、スクールの場で分かりよかったです。」



保護者も自転車で体験

4 市民活動—交通教育NPO OSCN—

ここで、「じてんしゃスクール」のスタッフについて説明します。

スタッフは約30名の市民活動団体です。運営は事務局(専任2名)が中心となって行います。

教員・歯科医・市議会議員・塾講師・二輪部品や車体メーカー社員・自転車のインストラクター・デザイナー等、自転車を愛する仲間で構成。それぞれの専門スキルや得意分野を生かした活動です。運営資金は、尾張旭市や地元信用金庫などの公的助成金や個人からの寄付を基にしています。

企業(運輸・自転車メーカー・食品関連等)からの貸し出しや協賛による支援も頂いています。



模擬ハンドルで安全確認

5 交通教育のネットワーク

OSCNとは、「尾張旭・セーフティー・サイクリスツ・ネットワーク」の略称です。この「ネットワーク」という言葉が、私たちの活動のキーワードです。なぜなら、交通教育に有効なのは、家庭・学校・地域における、繰り返しの公共マナー、交通マナーの啓発にあると考えられるからです。そのために必要なアクションは、家庭・学校・行政・警察・指導理論研究者・民間企業、これらの連携(ネットワーク化)です。それにより、現実の走路環境を踏まえた、論理的で客観的な交通教育内容に成長できると考えています。

同時に、専門家の知見に触れる機会は、ボランティアスタッフのモチベーションのアップや、参加者の交通教育への関心向上も期待できます。

一方、ネットワーク化を進める上で、横断的に動ける推進者(コーディネーター)の存在が必要です。そういった人材を育てる、または、発掘していくことも、地域との連携による事業を進めていく上では大切なことだと感じます。

6 連携による「じてんしゃスクール」

では、「じてんしゃスクール」における、行政・警察との連携について説明します。

尾張旭市には後援を頂き、市民活動課交通防犯係が窓口となり、会場や備品の貸し出しなど、準備段階からご協力いただいています。当日は、OSCNスタッフと共に、指導の場面でも協働しています。時には、会場の一角で、市の啓発プログラム「暗室車による反射材体験コーナー」の設置、運営をお任せすることもあります。



市民がつなぐ交通教育ネットワーク

守山警察署の交通課とは、事前に打ち合わせの上、会場内にパトカーを配置し、短時間の講話をお願いしています。講話の内容は、近隣で起こった事故事例を交えた話。実物の「止まれ」の標識を使った話。水風船を利用したヘルメットの大切さの話など。実技のスクール中には、一時停止の場所などで指導にあってもらいます。

連携という視点から、さらに3つの事業をご紹介します。

7 広がる連携

(1) 「キープレフト アクション」

「自転車は車の仲間！左側通行！」と呼びかけたこの啓発活動は、尾張旭市市民活動促進助成金事業としての実践です。

4か月間、スタッフが適時「左側通行」のタスキをかけ、自転車に乗って市内を一人で左側通行しました。

9月には、「白バイを先頭にキープレフトで走ろう！」と一般参加者も募った啓発走行会を実施。警察との協議と協働により、白バイ先導も実現しました。この出発式には、市長から参加者の方々へ、啓発の意義についての激励の言葉と出発の号令を頂きました。

走行後には、シンポジウム『自転車走行空間と交通教育の未来』を実施。各方面の専門家の



白バイ先導による、キープレフトアクション

知見に触れることにより、一般参加者の方々も、交通教育の未来について考えるきっかけくアクションの創出となることを目的としました。

ご登壇いただいたパネリストは8人。警察官、市担当者、デザイナー、交通評論家、教育長、元環境省中部地方環境事務所所長、自転車メーカー担当者、自転車競技の元プロ選手です。

(2) CD「OSCN じてんしゃスクール放送局」

自転車の交通安全利用啓発CD「OSCN じてんしゃスクール放送局」。これは、愛知県地域連携交通安全モデル事業として委託を受け実践しました。

「児童、生徒及び先生が、自転車の交通ルールや公共マナーについて知る機会を増やす」ことが目的です。楽しく聴けるよう配慮したCDをOSCN企画編集により制作。尾張旭市内の小・中・高校へ配布し、放送を依頼しました。

交通ルールや公共マナーは一度で身につくものではなく、周囲の大人が声をかけたり、自ら考えたりすることで少しずつ定着していきます。反復と定着効果のため、継続的に利用していただけるよう、短時間の音声のみのCDと致しました。

4巻1セット。各巻、約8分、3部構成。

<交通安全ゲストトーク><公共マナー講座><自転車安全クイズ>。

出演者は、警察官、マウンテンバイクの元プロ選手、交通評論家、市担当者、自転車安全教育指導員、パーソナリティーなど。

録音については、地域のFMラジオ局、ラジオサンキューにご協力を頂き質の高い音源で収録できました。

学校における放送実現に向けては、教育委員会や市民活動課交通防犯係からの心強い協力も得られ、多くの公立小中学校で、給食や授業時間等に放送を実施していただきました。

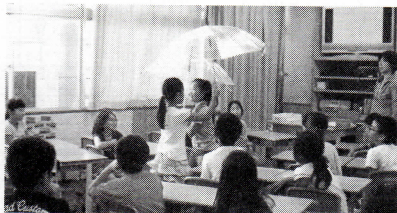
また、地域のFMラジオ局で近隣（尾張旭市・瀬戸市・長久手市）に向け放送。市立図書館でも貸出用に所蔵していただいています。

(3) 3段階の出前授業（「矢橋方式」導入）

尾張旭市や近隣の公立小学校において、交通評論家 矢橋昇氏との協働による、3段階の交通安全授業を開始しました。「矢橋方式」の公共・交通マナー授業に、OSCN自転車実技指導を組み合わせた実践です。

- ①公共マナーを土台とした教育<理念>
- ②交通ルール、マナーの習得 <知識>
- ③自転車の運転技術の講習 <技能>

小学校の先生方からは、「公共マナーや交通ルール・自転車の運転技術について具体的に教える、今回のような指導の機会は必要だと感じる。」という感想を頂きました。



傘を題材に、公共マナーを考える場面

8 おわりに

平成27年度は、約3,000名の児童、生徒、親子、大人を対象に、自転車による交通教育、指導及び啓発を実施しました。家庭・学校・地域での交通安全への関心の高揚・マナーアップ・ルール遵守が、参加者から周囲へと波及するの

を期待しています。

一昨年、OSCN主催のシンポジウムの中で、ロードレースの現役プロ選手、小森亮平選手（AISANレーシングチーム）から、遠征先のフランス（ノルマンディー地方）の自転車事情について伺いました。

フランスといえば、『ツール・ド・フランス』なども有名で、自転車の歴史と文化が豊かな国です。小森氏の話によると、現地の道は狭く、広々とした自転車専用道があるわけではなかったそうです。しかし、「全体的に、ルールを守ろうという意識が高いように感じた。」そういうことができる理由には、「交通教育の団体もあるようだが、フランスでは、親が子どもと過ごす時間が長く、家庭で繰り返し、交通教育を受ける機会が多いからなのではないか。」と語ってくれました。

本誌で以前にも紹介されたように、欧州等の国々の中には、幼稚園から中学校まで一貫した交通教育を、発達段階に応じた内容で位置付けている交通教育先進国も見られます。

日本でも、このような一貫した交通教育、公共マナーや交通ルールの段階的指導が、ますます必要とされているのではないのでしょうか。

交通社会の中で、教育効果がある一定の成果として表れるには、とても時間がかかります。だからこそ、私たち市民にできることとして、ネットワークを生かした交通教育実践を、これからも一步一步推進していこうと思います。



OSCNの活動や、じてんしゃスクールの様子などをホームページに掲載しています。ご覧いただけましたら幸いです。

<http://www.oscn-school.org/>